太宰府の文化財 (221)

日輪鍬形前立付二十四間筋兜
色々威腹巻　小具足付　一領

外鉢高9・5㎝　胴高30・3㎝
江戸時代　太宰府天満宮蔵

幕末に太宰府天満宮の延寿王院に身を寄せていた三条実美が所持していた甲冑です。

兜は24枚の鉄板を矧いでいるので24本の筋が付いて見える様式（二十四間筋兜）で、その前に鍬先の形をした立物（鍬形）と中心に日輪を立てています。鉄製の兜の鉢の後方に垂れて首を保護するのが鞠ですが、これが紺色の糸で綴られ、その先端（菱縫板）は紅の糸で綴られています。兜の眉庇の左右に立っているのが吹返し。鞠の両端が外側に反り返ったものです。

顔を保護するための面頬は鉄で、いたち毛の髭を植えています。

甲は徒歩用の防具として発達した腹巻という形です。古くは右脇で引き合わせる形を腹巻といいましたが、近世になるとその形を胴丸、背面中央引合を腹巻というようになります。胴は白、紅、萌黄、紺の4色の糸で本小札5段を綴っています（威）。3～5色の糸を使って威（緒通）したものを色々威といいます。胴の下に垂らし大腿部を保護するためのものが草摺です。紺糸で5段の草摺を綴り、一番下は紅糸で菱縫をしています。

腕を被う籠手は細い鎖と金物で仕立て、足は黒色に塗った皮製の脛当と熊毛植えの浅沓（貫）を付けました。

三条実美が慶応3年（1867）の王政復古で京に帰る時、神の加護に感謝して天満宮に奉納したと伝えられています。

この甲冑は、やはり実美所持で、通古賀の陶山一貫に贈られた甲冑とともに、太宰府天満宮の宝物殿で見ることができます。（11月末まで展示）

（財）古都大宰府保存協会

▲甲冑の各部の名称（「角川日本史辞典」より）

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 (222)

銅鏡「水鏡」一面

直径36・5㎝　外縁高1・5～1・7㎝
中国元代末期（14世紀）　竈門神社蔵

竈門神社に「水鏡」と呼ばれて、大切にされてきた銅鏡があります。鏡の背面には紋様がありませんが、一条の線がまわっています。背面中央にある紐を通すつまみは長径5㎝の分銅型をしています。大味な印象を受ける作りは、中華あるいは天竺から伝来したという言い伝えがあながち根拠のない話でもないような、外来品の可能性を含んでいるということです。この鏡に似た鏡が大阪市北区の中天神社にあったそうで、拓影によると永和5年（1379）に寄進されたことが刻まれていました。永和5年は中国では明が始まったばかりの頃です。中天神社の鏡が中国製であれば、それまでに輸入されたわけで、鏡の製作時期は前代の元の末期くらいまで遡るのではないかとも考えられています。竈門神社のこの鏡を考えるときの参考になります。

さて、この鏡は「水鏡」と呼ばれるように水に関係する、ここではすなわち雨乞いの祈祷の時に使われました。この鏡が納められている元禄15年（1702）製の桐の箱の蓋裏には次のような由緒が書かれています。

箱蓋（元禄15年製）　▲表　▼裏

（写真提供：九州歴史資料館）

筑前守にて国に侍りけるに、日いたく照りければ、雨の祈にかまどの明神にかがみをたてまつるとてそへたりける
雨ふれと祈るしるしの見えたらば水鏡とも思ふべきかな

藤原経衡は平安時代後期の公家で歌人です。大学頭や大和守、筑前守を歴任しました。

藤原経衡が筑前守だった時、旱の害で困ったので、雨乞いのために竈門の神に鏡を奉納した。その鏡が今に伝わるこの水鏡で、鏡に添えた歌一首が『新続古今和歌集』に載っているということで、その歌が書かれています。

経衡が奉納した鏡であれば平安時代後期までに造られた鏡ということになり、中国の元代末期ごろの製作らしいという前述の説と合わなくなります。経衡奉納の鏡の2代目なのかもしれませんが、今となってはよくわかりません。

江戸時代は宝満山の山伏によって水鏡を使った雨乞いも行われたようですが、山伏たちも去った今は、竈門神社の神宝として大切にされています。

（財）古都大宰府保存協会

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

大宰府の文化財 (223)

太宰府天満宮絵馬堂の絵馬

「永錫」の書　1面

江戸時代　亀井南冥筆　太宰府天満宮所蔵

▲「永錫」の書　樟材　縦185cm　横279.5cm

この絵馬は亀井南冥が奥村玉蘭に書き与えていた書を、玉蘭が額に仕立てて掲げたものです。

絵馬の裏面にこの書が掲げられた謂れが書かれています。それによると奥村玉蘭が太宰府天満宮に書画堂つまり絵馬堂がないのは文道の神様らしくないので、自分が寄附を募って、文化10年（1813）の冬に建物の完成を見た。そして翌年、南冥が玉蘭に書き与えていた「永錫」の書を、福岡本町の人々の援助で額装にした。しかしこの額を書画堂に掲げることが出来たのは、南冥が亡くなって2年後のことで、残念ながら南冥はこれを見ることが出来なかったので、このことを書いておく、という内容でした。

そして額を作る時に援助してくれた福岡本町の人々や彫りを担当した匠、漆の塗り師などの名前も裏面に彫られています。

亀井南冥は江戸時代中期の儒学者で医者でもありました（1743～1814）。名は魯、字は道載、通称主水、号は南冥です。町医者であった父が、南冥の文才に望みを託し、医学以外に儒学や文芸を学ばせ、朝鮮通信使との漢詩のやりとりや、唐人町に開いた私塾での儒学の講義によって、学者としての名声を上げていきました。

そして第7代藩主黒田治之の時、町医者から武士の身分に取り立てられ、治之の侍講となりました。また藩校が作られた時、西学問所甘棠館を任されましたが、古学派の南冥は朱子学派の東学修猷館の竹田家との軋轢、豪放な言動などが災いしてか、8年後に突然、廃官・謹慎となり、その6年後甘棠館も火事で焼け、廃校されてしまいました。

この絵馬を奉納した奥村玉蘭と南冥との関係は、玉蘭の学問の先生が南冥で、玉蘭を一族の者が藩にはばかって追放するくらい、玉蘭は南冥ら亀門派を援助しました。それほど尊敬する師南冥の書を、自分が中心になって建立寄進した絵馬堂に掲げることが出来て、玉蘭は感激したことでしょう。（太宰府の文化財129・140参照）

永錫の錫は、賜うとか与うという意、金属のスズもこの字です。

額装に助力してくれた人々の福岡本町は現在の福岡市中央区舞鶴二・三丁目くらいにあたると思います。

最後に文化11年（1814）に額装が出来たのに、実際に絵馬堂に掲げたのは南冥没後2年の文化13年になったのは、どういう理由からだったのでしょうか。文化11年3月の南冥の不慮の死が影響しているのでしょうか。それとも南冥の書を掲げにくい事情でもあったのでしょうか。玉蘭は自分で描いた「西都奇観」の絵馬を文化13年に奉納していて、それとの関連でしょうか。

（財）古都大宰府保存協会

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

大宰府の文化財 (224)

龍泉窯系青磁椀

南宋時代　観世音寺五丁目出土

▲龍泉窯系青磁椀　口径10.3㎝　器高（高さ）4.7㎝

平安時代の人々が「秘色」とか「あをじ」と呼んで珍重した青磁の中でも、特に美しいと言われたのが龍泉窯で焼かれた砧青磁です。

砧の名の由来はこの青磁作品の一つである花生の形が布を打つ砧に似ているからとも、千利休が所持した青磁花生に大きなヒビ割れ（貫入）があり、ひびき（貫入）のある花生ということを、秋夜の砧のひびきとしゃれて、その名が付いたとも言われています。

それまでのオリーブ・グリーン色の青磁が美しい粉青色と呼ばれるブルー系統の青磁に変わっていったその代表的な窯が龍泉窯です。

ところで龍泉窯の場所は揚子江の南にある浙江省の龍泉県他です。砧青磁が焼かれた時期は13世紀半ばから14世紀前半頃の南宋の時代で、龍泉窯の最盛期でもありました。

龍泉窯青磁は国内向けだけでなく、当時の主な貿易品として日本や東南アジア、さらにはアフリカにまで輸出され、世界的に有名になりました。日本人はこの青磁をこよなく愛したらしく、砧青磁の遺品は日本に最も多く、また全国各地の鎌倉・室町時代の遺跡から数多く発掘されるそうです。韓国の新安沖で発見された沈没船の積荷の内、2万点の陶磁器の半数が龍泉窯青磁だったことからも窺い知ることが出来ます。沈没船は京都の東福寺が関係していたと考えられる船で、中国の浙江省寧波を出発して博多へ向かっていたということです。

さて、写真はこの砧青磁と別称される時期の龍泉窯で焼かれた小椀です。ご覧のように割れてはいますが、完全な形に継ぎ合わせることができ、讃美された美しさを見せてくれました。

これは市役所の県道をはさんで向かい側を発掘した時に、13世紀半ばから14世紀にかけての地層から見つかりました。

㈶古都大宰府保存協会

梵鐘

世界各地で大水害や大干ばつのニュースが報じられているが、昨年、日本においても長雨による冷害が発生し、水稲をはじめ大きな被害をもたらし、また本市をはじめ全国的にも異常気象の影響と思える大きな災害を被った。

農家である我が家は水害の直接の被害は無かったものの、水稲が冷害の被害を受け、稲刈り後の収穫量は例年よりも2～3割少なかった。

報道によると2003年の世界全体の穀物収穫量は消費量を9300万トンも下回り、穀物備蓄量は過去30年間で最低の水準に落ち込んでいる。日本の食糧自給率は40％といわれているが、国民1億2000万人のうち7200万人分の食料は外国頼みである。地球温暖化による異常気象が起きれば食糧輸入は途絶え、食糧危機も危惧されている。

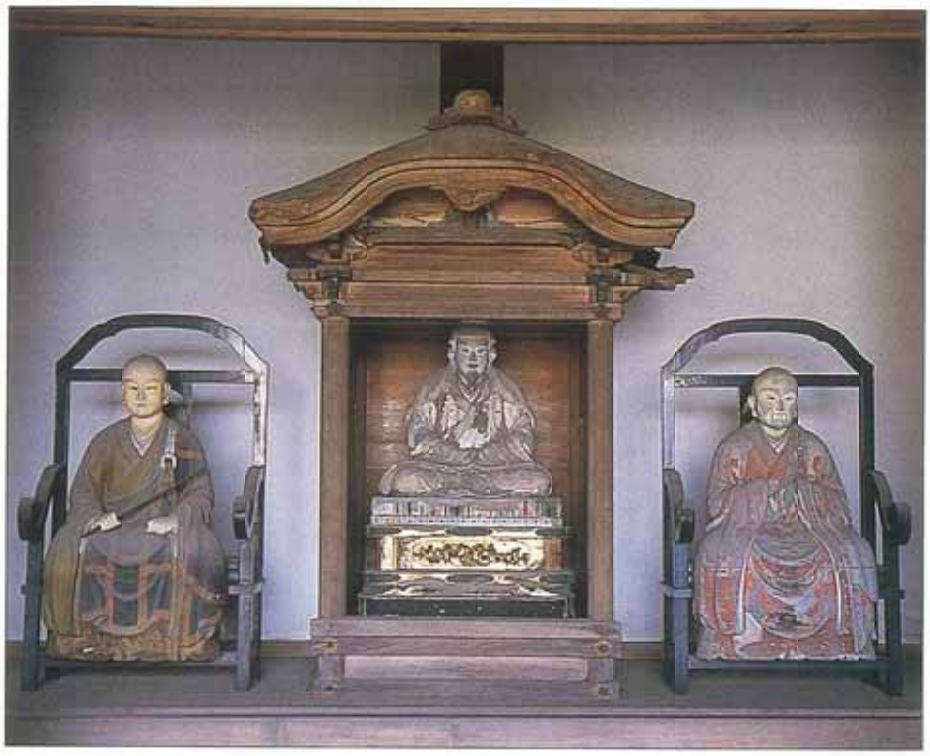
今年の天候が穏やかな年になることを期待したい。（蔵）

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

大宰府の文化財 225

光明寺無準堂の三像

江戸時代　光明寺蔵



▲ 木造鉄牛円心像
像高 55.6cm
玉眼
彩色

▲ 木造渡唐天神坐像
像高 37.1cm
玉眼
彩色

▲ 木造仏鑑禅師(無準師範)像
像高 52.0cm
玉眼
彩色

この三像は光明寺の創建に深く関わった方々です。その創建には次のようなお話が伝えられています。

今から750年前の鎌倉時代、中国で禅を学んで来た聖一国師円爾弁円が大宰府横岳の崇福寺にいた時、天神様が現われ、禅のことをたずねられました。聖一国師は自分の師である中国径山にいた仏鑑禅師無準師範に参禅するよう勧めました。そこで天神様は中国に飛び、禅師に会って、たちまちの内に禅を極め、その証しである法衣を授けられて戻ってきました。それからしばらくの後、天神様は聖一国師の跡を継いで博多承天寺の住職であった鉄牛円心のもとに現われ、授かった法衣を安置することを願われました。そこで鉄牛和尚は太宰府の神廟の近くに寺を作り、衣を安置しました。それが光明寺の始まりです。

以上のように光明寺の開山には、中国に飛んだ天神様と禅を教えた仏鑑禅師、授けられた衣を安置して実際に寺を開いた円心和尚の3人が深く関わっているのです。

まず写真中央が天神様です。中国に渡って禅を極めた天神様を渡唐（宋）天神と言って、中国風の衣を着て、法衣を納めた袋を肩からかけ、天神様を現わす梅花の枝を持った姿に作ります。この像は残念ながら梅の枝がなくなっていますが、枝を差す枘穴は合わせた手に残っています。

向かって右が師匠の仏鑑禅師、左が鉄牛円心和尚です。

この三像は渡唐天神像の台座に残る銘文から、江戸時代初期の寛文5年（1665）に、住職であった知的が造らせ、無準堂に安置したことがわかります。仏師の名は残念ながら記録されていません。

知的は、この三像の銘文の他、本尊の木造釈迦如来坐像の宝永2年（1705）の修理銘にも「前住老僧知的禅師」と記され、江戸時代の寛文から元禄ごろにかけての住職だったことがわかります。

三体は山門を入って左手の階段を上った無準堂に祀られています。

(財)古都大宰府保存協会

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

大宰府の文化財 226

雲版

銅鋳造　江戸時代
縦37㎝　幅35・7㎝　戒壇院蔵

お寺で食事などを知らせるために鳴らす楽器のことで、火版・長版・打版・斎板ともいいます。雲版という名は上部の両肩に切れ込みがあって雲の形に似ているのでこう呼ばれます。もともと中国の楽器で、宋の時代には雲形が完成したらしく、日本には鎌倉時代、禅宗とともに入って来ました。禅宗のほか浄土宗や日蓮宗、茶道で使われます。

▼銘文②

▲銘文③　▲銘文①

写真の雲版は戒壇院に伝わるもので、刻まれた銘文によると、江戸時代後期の文政6年（1823）に再造されたことがわかります。

これを造った工人は柴藤善左衛門寛茂といい、博多の鋳物師として知られた五家の一つ、柴藤の一族です。柴藤氏の祖先は柴田勝家の一族の柴田将監の子で、賤ヶ岳の戦いで勝家が滅んだ後、豊臣秀吉の怒りを恐れ、筑前の姪浜に隠れ住み、姓を柴藤に改めたといわれています。

その子孫が鍛冶屋を始め、博多西町に住んだので、そこの町名を釜屋番というようになったということです。現在の福岡市博多区奈良屋町の一角です。柴藤氏を始め、博多の鋳物師は茶道具の釜や日用品の鍋・釜、また農具などを作る釜師でしたが、他に仏具や梵鐘、燈籠など大きいものも造りました。この辺りで柴藤の作品は太宰府天満宮の灯籠や相輪樑、筥崎八幡宮の梵鐘などが知られています。

この雲版の作者善左衛門寛茂については、ここに刻まれている外わかりませんが、先祖から続く善左衛門の名を持っているので本家筋の人ではないかと思われます。弘化4年（1847）に太宰府天満宮に相輪樑を再建寄進した人々の中にも柴藤善左衛門の名がありますが、この善左衛門は同じく弘化4年に「柴藤家年中行事」を著した善左衛門正知と考えられます。正知と寛茂が同一人物か、親子かなど、残念ながらはっきりしたことはわかりません。

その他、文政6年当時の戒壇院の住持が自勝というお坊さんだったことなどが知られます。また再興する前の雲版に記されていたと思われる銘も刻まれていますが、その解釈がなかなか難しいのです。

銘文①から天明6年（1786）5月に亡くなった禎誉妙操大姉のため、天明7年7月、当時の戒壇院住持太室玄昭が賛（銘文②）を書いた雲版が造られて寄進され、文化2年（1805）3月、供養のために安誉黙止居士の名が追刻されたのでしょう。それが壊れたので文政6年に造り替えて、最初の銘文と改鋳に当たっての銘文を刻んだと考えてみました。

戒壇院は天明6年ごろ禅寺支配が確立するので、禅寺で必要な雲版が、天明7年に寄進されたのでしょうか。

㈶古都大宰府保存協会

銘文①（撞座右側刻銘）
天明六丙午五月十五日／為禎誉妙操大姉／文化二乙丑三月二十七日／為安誉黙止居士／掛西戒壇／于時／天明七年丁未七月日

銘文②（撞座上部刻銘）
法善禅悦香積起雲／三代礼楽維爾所分／大室銘之

銘文③（撞座左側刻銘）
于時／文政六年癸未五月日／再興寄附／柴藤善左衛門／寛茂／現住／自勝

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

大宰府の文化財 227

観世音寺資財帳（国宝）

3巻（元来は1巻55枚を分割）
平安時代
東京藝術大学保管

資財帳とは、寺院の財宝の散逸や不正支出を防止するために定期的に京の太政官に提出させた財産目録です。観世音寺に関しては延喜5年（905）と嘉保年間（1094～1096）のものが現存しています。

写真は延喜5年の資財帳です。お寺の所有財産を○○章というように項目に分けて列記しています。奈良時代の資財帳は仏物―仏像に関する物品、法物―経典に関する物品、僧物―僧侶・教団に関する物品、通物―用途が限定できない物の4分類を基本としていましたが、煩雑なので平安時代になると堂舎や収納場所ごとの記載に変わっていきます。しかし、この資財帳は仏殿章・仏物章・法物章・通物章・伎楽章・大衆物章・水田章・山章など、4分類と場所別を合わせたような形になっています。

記載された内容を少し見て見ましょう。

寺院の建物や仏像、経典はむろん、お供えに使う銀の鉢などの容器、お香、数珠、鏡、伎楽の面や衣装、箏や鼓などの楽器、毛氈、袈裟など仏様や僧侶に関係する物品、荘園の田圃や畑、建物、製塩用の釜や燃料を採るための山、瓦作り用の道具や作業小屋、そして寺に所属した奴婢などが細かく記述されています。そして物の状態―例えば小破や大破など破損の状態、それを点検した年、現在それが有るとか無いとか、いつ修理したなどの注記もあります。

過去の点検記録を注記したり、逆に寺の縁起を記載していなかったり、通常の寺院資財帳の体裁とは少し異なるので、この観世音寺の資財帳は寺院の流記資財帳というよりは交替実録帳に近いものではないかとも考えられています。

交替実録帳というのは国司の交替時、諸施設や資財について欠失がないか前任者を監察して書類を出しますが、前任者死亡の場合は、欠失したものだけでなく全資財について記載した交替実録帳を作り、中央の監査に備えました。平安時代になると寺院の財産も監査されるようになったので、資財帳も監査され易い形に変化していったのではないでしょうか。この観世音寺の資財帳もその姿を反映したものといえるかもしれません。

資財帳の詳しい性格は今後の研究をまつとして、1100年前、観世音寺にどんなお堂が建ち並び、堂内や仏様を飾る装飾が施されていたか、などなど、資財帳は様々なことを教えてくれます。

この資財帳全文は12月に出版された『太宰府市史古代資料編』に載っています。

㈶古都大宰府保存協会

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 228

製塩土器

奈良時代　通古賀出土

人間は砂糖がなくても生きられますが、塩がないと生きられません。その塩を岩塩が存在しない日本では、海水の塩分から採るしかありませんでした。その方法として一般に知られているのは塩田だと思いますが、塩田以前の製塩法の一つが土器による海水の煮沸です。

写真右下の円錐形の土器は通古賀で出土したもので、塩作りの最後の段階で使った焼塩用土器です。ほかの二つは古代の塩作りに実際に挑戦してみた結果です。

塩田以前の古代の塩作りはどのような方法だったのでしょうか。『万葉集』に出てくる「藻塩焼き」の表現や近年の遺跡の調査などから次のような工程が推定されています。

まず海水から濃縮した塩水（鹹水）を作るため、海藻を採ってよく乾燥させ、藻に塩の結晶を付着させた後、簀子などの上にのせ、下に鹹水溜の容器や施設を設けて、上から繰り返し海水を注ぎ、さらに下に溜った鹹水も、また上から注ぐことを繰り返して、出来るだけ濃い鹹水を作り、そのうえ乾燥させた藻を燃やし、塩分を含んだ灰を鹹水に溶いて、上澄みを煮詰め（煎熬）、粗製塩を作ります。その粗製塩をもう一度火にかけ焼き固めると塩（堅塩）が完成します。写真の円錐形と円筒形の土器は、最後の段階、つまり粗製塩を焼き固める時に使います。

そしてこの製塩用土器は製塩用であるとともに、出来上がった塩を運ぶための運搬容器にもなりました。それで海から遠い太宰府でもこの2種の製塩土器がたくさん見つかるのです。特にまとまって出土したのが観世音寺の北側からです。観世音寺は経済活動の一環として塩の生産をしているので、その関係でしょうか。また多量に廃棄された場所自体の性格は、塩をたくさん使う所つまり寺の台所－厨的施設だった可能性も示唆しています。

他に太宰府では宝満山中からも特徴的に見つかっています。これは神祭りをした跡だと思われます。宝満山は古くから神が坐す山として祀りが行われましたが、その場所だったと思われる所で製塩土器が発見されます。今でも塩は清めやお供えに使われますが、昔もそうだったのでしょう。

写真の製塩用土器は8世紀－奈良時代に出現し、9世紀半ば－平安時代初めごろには姿を消していきます。塩作りが土器製塩から塩浜方式へ変わっていったためでしょう。

最後に、写真にある古代の塩作りを実験した小西信二さんによれば、作業に手間がかかり、そのうえ製造過程で発生する臭気には最後まで苦労したそうで、『万葉集』に志賀の海人が塩焼きする時は髪をとく暇もないと詠まれた、その作業の大変さ、労働のきつさが偲ばれます。

これらの土器は、大宰府展示館で見ることができます。

（財）古都大宰府保存協会

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601

太宰府の文化財 229

八稜鏡と走獣葡萄鏡

大字向佐野・日焼遺跡出土

区画整理が行われている向佐野で平安時代初めのお墓の中から、鏡が見つかりました。一つは写真③の走獣葡萄鏡です。これは「踏み返し」という、日本に輸入された中国の鏡を鋳型の原型として日本で鋳造するやり方で作られた鏡です。踏み返しは何度か行われる-つまりコピーのコピーが繰り返されることがあります。すると、だんだん鏡の文様が不鮮明になってきます。写真の鏡も踏み返しが繰り返されて造られたらしく、文様は不鮮明で葡萄のつるや葉など細かい文様はほとんどつぶれてなくなっています。

鏡の質としてはあまり良いものではありませんが、このような踏み返しで造られた唐式鏡の使用は近年の出土例から平安時代の初めの9世紀初頭まで続くといわれていますが、今回の例もそれを裏付ける発見と言えましょう。

写真①の八稜鏡はX線写真(写真②)で見ると向かい合う2羽の鳥と植物、外周には蝶々が配されていて、繊細で美しい文様が施されています。この鏡は前記の踏み返し技法による唐式鏡と異なり、1面1面、へらで文様を刻んで鋳型を作るへら押し技法によって鋳造したものです。

奈良時代を代表する唐式鏡が平安時代になるとへら押し技法の和鏡、しかも多くが8枚の花弁の中央に稜を付けた八稜形の鏡に変わってくると言われています。

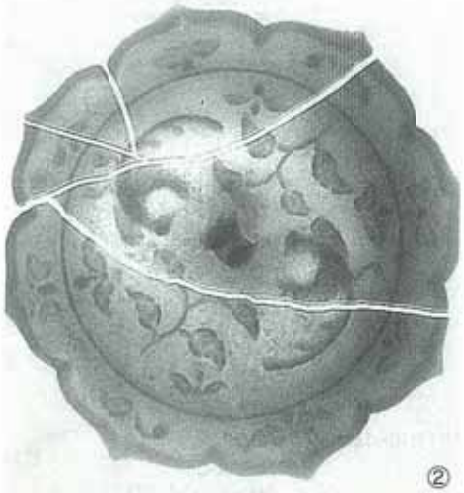
写真の八稜鏡は、一緒に埋葬されていた緑釉陶器などから平安時代前期の9世紀から10世紀にかけてのお墓に入れられていたことがわかりましたので、この鏡の製造時期が推定でき、平安時代から始まるとされる和鏡の生産時期を考える上で貴重です。

この二つの鏡は奈良時代の唐式鏡が踏み返しによって文様がほとんどわからなくなり、使用目的の変化もあって平安時代になると次第に和鏡が造られていく、その過渡期の様子を窺わせるものとして興味深い事例を提供しています。またどの墓からも出て来るわけではない鏡が2カ所から出土したということ、これらの墓が造られた丘陵は以前、買地券や官人の帯飾り、鏡などが見つかった宮ノ本丘陵の続きであることなどを考えると、この墓地は大宰府の官人たちの奥つ城だったのではないかとも推定されています。

最後に鏡は古墳時代の権力の象徴や祭祀の道具から、地鎮や鎮壇具を経て、ものを映す機能が重視されるようになり、平安時代になると姿見、化粧道具へと目的が変化していきます。この二つの鏡も姿を映す、今の鏡のような使われ方をしたのでしょう。

(財)古都大宰府保存協会

▲八稜鏡(直径11.5cm、厚さ0.6cm)



▲八稜鏡X線写真

▲走獣葡萄鏡(直径11.0cm、厚さ0.4cm)

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課:〒818-0198 太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府の文化財 (230)

衣掛天満宮の絵馬

国分二丁目所在

国分の旧道（日田街道）沿いにある神社です。旧道のそばに「文化九年八月」の銘が彫られた石の鳥居があり、その奥の石段をトントンと上がっていた所にお社が建っています。ここに掲げられた絵馬はほとんどが、境内にあった衣掛けの松という天神伝説ゆかりの松が枯れたので、それを板に製材して使っています。

▲老松（衣掛けの松）図額　縦（最大）51cm　横（最大）186cm
松材板地　昭和28年　山本南窓筆

▲「聖徳」の書　縦（最大）74cm　横（最大）203.5cm
松材板地　昭和27年　可耕筆

(1) 老松（衣掛けの松）図額

衣掛けの松と当時の拝殿を描いたものです。この絵を書いた山本南窓さんは、中学校の美術の先生で、衣掛天神のすぐ近くに住んでいた方です。神木の衣掛けの松が枯れたのを惜しんだ氏子の方々が、在りし日の松の姿を絵で残そうと南窓先生にお願いして、この絵馬が掲げられました。

「戦後間もなくの時代で、絵具も質が余り良くなく、変色してしまいましたね」とはご子息の弁。南窓さんは花や風景画を得意としていらしたそうです。南窓先生はもう一点、遠賀町の井手神社の「別府山全景図」絵馬の作者ではないかと思います。「南窓」の銘しかありませんが、昭和27年作、そして典型的な絵馬の題材ではなく風景画という点で推定しました。

(2)「聖徳」の書

松の製材を頼んだ二日市の製材所の主人が、製材のいきさつを聞いて、では自分がその一枚を奉納させてもらおうということで自ら字を書いて奉納されたということです。ですから「可耕」というのはその製材所のご主人の雅号です。製材所の名前がなかなか分からなかったのですが、筑紫野市の方がやっと探し当ててくださいました。岩井屋材木店の高田寿弘さんです。ご子息がご健在で、その方が松の木を運んだということです。

▲延寿記念扁額（昭和28年）

(3) 延寿記念扁額　5面

昭和28年、58年、平成元年、10年、13年の長寿者名を列挙した絵馬です。平成元年までは神木の衣掛けの松材を使っています。

(4) 富嶽図

縦63cm　横69cm
日本画額装　昭和40年

氏子の松島元さんが71歳の時、富士山の絵を描いて奉納したものです。

(財)古都大宰府保存協会

編集／太宰府市役所総務部秘書広報課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601